

少子化と学力低下

最近小中学校の児童・生徒数が減少している。いわゆる少子化の結果であり、我々塾業界はまさに存亡をかけた時代に今後入っていくことになる。

ただ、学校はというと、もちろん複数の学校が統合することはあるが、教職員が急激にリストラされることは無いだろうから、そこに余剰人員が出ることになる。そうなるとその昔は悲願であった「少人数クラス」も無理ではなくなってくる。現状でも複数の先生が指導に当たるチームティーチングの科目も増えつつあるが、近い将来1クラス10名という、まるでうちの塾のような形態にまでなるかもしれない。こうなると一人一人に目は行き届き、さぞや「理想的な」教育を受けられると思われる方もいらっしゃるであろう。

確かに指導する立場としては1クラスの人数が少ない方がやりやすい。しかし少子化は1学年の人数や学校全体の人数自体が少なくなるわけである。人間とは「人之間」と書くように本来ひとりで生きるものではない。集団の中で育つことにより、刺激しあいながらより多くの物事を吸収していくのである。ところが集団の人数が少なくなると競争意識が薄れ、さらに努力をしようとする向上心が育たなくなってくる。本来力のあるものが周りを見て「このくらいの位置にいればいいや」と思い、それ以上には伸びようと努力しなくなるのである。

もし、本当に少人数教育になることだけでどんどん伸びるのなら、首都圏やベットタウンのマンモス校よりも、1学年10名にも満たないような過疎の山村や離島の学校から優秀な生徒がどんどん輩出されるはずであるが、現実にはそうなっているとは思えない。

この地元の中学も何年か前は1学年300名いた生徒が現在は150名を下回る学年もでている。さてこの影響を考えてみよう。例えば上位1割といえは今も昔も「優秀」と言えるのだが、昔はそれが30名もいたことになる。この人数はやはりトップ「集団」と呼ぶにふさわしく、1位になることは無理にしても、何とかその中に入りたいという目標になるものであった。しかし現在の人数ではそれが15名となる。同じ割合なのだが、絶対的な人数が少なくなると、彼らに対する評価は「特別な人たち」と変わってくる。これがさらに10名を切るようになると、仮にそれが上位1割であったとしても、まわりの見方は「勉強好きの変人」になってしまう。こうなるともはや憧れではなく、イジメの対象にさえなりかねない。つまり「がんばる」ことで周りから遊離しやすくなってしまうのである。周りや仲良くつきあっていくためにも、あまり努力をしない、めだたないようにする、そんな雰囲気広がりがつつあるようで心配である。

やはりどんなイベントや集団であっても、人数が少ないというのは活気を失わせてしまうものである。私は学力低下の原因の一つに少子化があるような気がしてならない。